

地理纂考

鹿兒島郡

三

			二二八八九	和書門
二八	一一	二〇	號	類
冊	架	函		

庫文閣内				
七	三	三	和書	
冊	架	號	類	

内閣文庫		
番號	和	22889
冊數	28	(3)
函號	176	151

内二二八八九號



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



地理纂考三之卷目錄

薩摩國

鹿兒島郡

鹿兒島

内一〇六六號



皇國

神社

照國

神社

鶴峰

神社

靖獻

神社

松原

神社

本學校

神社

女學校

日吉

神社

谷峰

城

蛙闘

孝女

千代

船魂

神社

嚴嶋神社

建部

神社

塩竈

神社

野元原

八幡

神社

一條

神社



聖之宮

神月川

伴掾館

牛落

比志島城

孝子喜左衛門傳

鳥越

白山神社

同郡

吉田郷

高加木神社

石堰

春日神社

紫原

高城

大磯

大磯

仙巖園

鹿兒島神社

伊尔色神社

青屋松原

原羅營

小山田瀑布

大鼓橋

菅原神社

牟禮之岡

黒山神社

三重嶽

都津宮神社

王子神社

松尾神社



地理纂考三之卷目錄

薩摩國

鹿兒島郡

鹿兒島

坂元村

皇軍神社

奉祀 武甕槌命 經津主命 倭建命 此他の數坐畧

在諸所に遷坐ありて今城下練兵所の中よ在る島津齋

興新建才祭日二月十一月初中日と云

照國神社

奉祀

明彦神勲照國命

島津大隅守齊彬ナリヤヒナの神靈と奉祀と文久三勅命ありて照國の神号と授りし權中納言と贈りしかく同五年五月廿日神像着御ありて城内大菊之間の假宮カミヤに坐まし同年四月より神殿造営始り元治元年甲子十二月其功畢りて同月十九日に遷坐ありて神領百石島津久光島津忠義父子より寄附せりしかく同二年己巳十一月廿二日まゝ從一位と授られ右大臣從一位藤原朝臣實美政卿奉行あり同三年壬午十二月二十三日勅使岩倉具視卿下向ありて御劔一振を奉納せらる

鶴峯神社

照國神社の後ツルカミ丸山マルヤマの南の山下十間許に在

る島津氏歷代男女老少の神靈と安置して毎年二月五日十一月中卯日と祭日とを

靖獻神社

照國神社の西十間余にあり慶應四年戊辰鳥

羽伏見の逆乱より始りて奥羽北越其外諸所の戦争會城降伏までの間に戦死せる薩摩大隅日向三ヶ國の人々此靈魂と安置す祭日正月三日五月十五日九月廿三日ありしを當社の祭祀と年中三度に定めりしを正月三日ハ鳥羽伏見の軍始り五月十五日ハ逆從江戸上野落城九月廿三日ハ會津降伏の日ハ此れをあり

松原神社 島津家十五代陸奥守島津貴久十六代修理大

夫義久父子の神靈と奉祀す例祭六月廿三日あり

本學校 照國神社の南一許町に在り學頭教官其佗師負及

い和漢西洋の學と講習とる車一に 朝廷此規則に依

女學校 松原神社より南一町余に在り始の女學校は規

則同し

同郡

西田村

日吉神社

奉祀 大國主命 例祭十一月 月初中日

西田村の生土神あり創建此年月且未由詳かり世に

是と山王と号して祭神とありの説あり附會あり

谷峰城 西田村日吉神社の上かり山上あり曆應四年四

月島津貞久東福寺城と抜き敵尾頭小城と保つ貞久ま

た尾頭と抜き敵走りて當城に據り上山城今の鶴丸と

襲はむと貞久まは是と敗る東福寺城の又勸應の頃

南方の賊此城に拠りて上山城と襲ふと日記に見えた

と按とらに南方の賊とい建久八年薩摩國圖田帳に阿

多地頭佐女島四郎とあり城者東鑑に阿多平權頭忠景

蒙勅勅云々といふ忠景と同族にて其後鯨島彦次郎入
道蓮道と云、若南朝に属して屢貞久く敵せし事日記に
見えり是等かる魚一

蛙闘 日吉神社より東八町余に水菅原神社ありて其前

かり池と天神池と云、又此池より東北六町許に南泉

院の池といふあり

此寺跡彼照國神社鶴峯神社等の寶
境内とかりて今寺も池もかり

曆の頃かりしと云、南泉院の池より數千の蛙來りて天

神池の蛙と闘ふ又此所より南一町許に窪田池と云、

又此池の蛙余多來りて天神池の蛙と搦く互に陣列と

成し聲と揚て相咬死と事其數と知り才既にして互

り引く翌日天神池の蛙南泉院の池に至りて闘ふ車前
日の如し此の如くあり事四日にして後遂に和平の状
にて互に死せ負ひ已り池に運飯りしと云、今に傳つて
奇談とす按るるに續紀神護慶雲二年秋七月壬申朔庚
寅太宰府言、肥後國八代郡正倉院北畔蝦蟆列廣可七丈
南向而去、及于日暮不知去處、まゝ同紀延曆三年五月辛
未朔癸未按津職言、今月七日卯時蝦蟆二萬許長可四分
其色黑斑、從難波市南道南行池列可三町、隨道南行入四
天王寺内、至於午時皆悉散去、又漢武帝元鼎五年蛙共藝
闘ひし由事文類聚に出つ然もハ例なき事非ずといハ

とと實に希有の奇事あり

孝女千代 千代ハ鹿見島下町の人あり

生九年月父と高
詳ありに

崎孝右衛門と号す幼くして父母に仕る事甚深切あり
成長して東吉郎右衛門に嫁し一子を生す夫及び其子
先立て死し父亦続て死し家貧く母と養ふ人おより故
り家に飯を母よ仕る事五十年其丁寧及復具し速へり
り此奉宦に聞え安永七年禄若手と賜ひまゝ市人共
志と合せ堀江町に宅地一ヶ所と與ふ天明元年増田温
孝女門の記と撰して石碑と堀江町に建つ碑文左の如
し

孝女千世 鹿府人也蚤寡獨與母居竭力奉養家素貧僅

嚙菘菜餌鮓以生活雖然營求甘旨進母母亦知其憲教

誠罷之於是温清之暇為人紡績務殖生産而視若之餘

資者以細解其意遂俾母終身不具勞矣鄉隣感其誠靡

不稱孝女之孝出於天性者矣市正審其狀聞于官官命

吏廉察皆有驗安永七年戊戌正月十七日賜米四石廉

賞之其月母卒時年過九十孝女事之凡五十年一日也

及母没市正愀孝女名與母同朽乃買宅一區於堀江坊

與而居之悉除其謀役標曰孝女之門因使温記其梗概

如此孝女父高崎孝右衛門嫁東吉郎右衛門生子嘉兵

衛^{ウヱ}皆^ミ先^ニ是^レ死^ス天明元年增^田温^撰町人にて俗^ノ称^ト考^ス兵^衛の

へい

鹿兒島

武^{タケ}村^{ムラ}日記に田^タ毛^モの二字と用^ハぬ此^ノ地^ノ稻^田

多^タ今^{イマ}武^{タケ}に作^スる^ハ意^ハ義^ハか^クの俗^ノ字

船^{フネ}魂^{マタ}神社

奉^{ホウ}祀^シ表^{ヒラ}筒^{ツツ}男^ヲ命^{ノミコト} 中^{ナカ}筒^{ツツ}男^ヲ命^{ノミコト} 底^{ソコ}筒^{ツツ}男^ヲ命^{ノミコト}

武^{タケ}村^{ムラ}船^{フネ}手^テの跡^ノにあり船^{フネ}手^テハ官^{クワン}船^{フネ}と繫^ツく役^{ヤク}所^トかり島^{シマ}津^ツ光^{ミツ}久^ク代^ノ十九^ノ時^{トキ}代^ノ貞^{チカ}享^{キョウ}五^ノ年^ノ戊^{ツチ}辰^ノ二^ノ月^ノ十^ノ八^ノ日^ノ鶴^{ツル}丸^ノ城^ノ北^ノ東^ノ北^ノ今^{イマ}の春^{ハル}日^ノ神^{カミ}社^ノの^ノか^ノと^ノり^ノに船^{フネ}手^テと建^{タテ}立^テし擁^{ヨウ}護^ゴの^ノ為^ノに當^マ

社^ノと創^{ソウ}建^{ケン}を慶^{ケイ}安^{アン}以^リ前^ノの地^ノ圖^ニに彼^ノ春^{ハル}日^ノ神^{カミ}社^ノ此^ノ不^レと^レ且^ニに加^カ子^コ町^{チヨウ}と^レあり此^ノ所^ノありあ^ハじさ^ラり明^{メイ}曆^{リキ}三^ノ年^ノ神^{カミ}社^ノ共^ニに船^{フネ}手^テと武^{タケ}村^{ムラ}より移^{ウツリ}し今^{イマ}又^{マタ}鹿^{シカ}兒^ジ島^ノ新^{ニウ}橋^{ハシ}の傍^ノに徙^{ウツリ}して神^{カミ}社^ノの^ノ武^{タケ}村^{ムラ}に遺^{ウツリ}まり

嚴^{シツ}嶋^ト神^{カミ}社^ノ

奉^{ホウ}祀^シ多^タ紀^キ理^リ毘^ヒ賣^{マイ}命^{ノミコト} 市^シ寸^{セン}島^ノ比^ヒ賣^{マイ}命^{ノミコト} 田^タ寸^{セン}津^ツ比^ヒ賣^{マイ}命^{ノミコト}

當^{タテマ}社^ノハ初^{ハツ}鶴^{ツル}丸^ノの城^ノ内^ノ二^ノ之^ノ丸^ノに鎮^{チン}座^ザありしと安^{アン}永^{エイ}四^ノ年^ノ乙^イ未^ミ十^ノ二^ノ月^ノ十^ノ一^ノ日^ノ此^ノ所^ノより遷^{ウツリ}座^ザありしといふ又^{マタ}坂^{サカ}元^{ゲン}村^ノ向^{ムカ}築^{キツ}地^ノに嚴^{シツ}島^ノ神^{カミ}社^ノありしと近^{チカ}年^ノ此^ノ處^ノに合^{カヒ}祭^{サイ}して一^{ヒト}社^ノ

と坂元村嚴島の社傳曰慶長十四年琉球国王尚寧
反島津家久家臣樺山久高と大将として平田増宗と副
將として是を伐じ久高等命を受けて琉球に渡り時に
洋中海上に天女出現し久高に向ひ吾ハ琉球國波上祠
かり辨才天女かり吾を齋祭り汝とも擁護をへり
いふ久高即船の簀板と海に投して神言果して信お
ハ此板を乗て疾く薩摩に至る飯朝の後國君に告て神
慮の如くおしめむと答ふ天女板を乗て忽去り琉球
平治して國に飯且久高是を國守に告て簀板と尋るに
十柱十柱上に出つの海濱にて是を得たり即其所に小島を築

き神社と建立して天女を祭り其後多賀の山下に遷し
又向築地に遷せりといふ此三女神と誤りて辨天と称
と諸所に多し是に限りを掛まとも畏き天照大神と
さへ大日如来或ハ大國主命と大黒かと云り類ハ皆妖
僧共り妄言かり因て王政復古の始めにかくの如き神
佛混淆の神社凡て佛体と除き大明神權現辨天等の稱
と廢止を

建部神社

奉祀 大己貴命

例祭九月十九日

俗に大田大明神或ハ武大明神と号す瀨村の生土神也

甲野山海双眸に收む初め今の社
頭より東十町許山上に鎮座ありし由傳稱せり創建年
坐等の年月詳かばに鱒口に奉寄進大田大明神云々于
時永正十七年十一月云々とあり
大隅国小根占郷越部
神社の条に詳かり

鹽竈神社

奉祀 鹽土老翁

例祭二月廿九日
九月二十五日

此地旧武村の内ありしと分て鹽屋村と云寛永五年建
立かりといふ延宝八年九月の棟札に薩州鹿府鹽屋村
鎮坐鹽竈明神則神代鹽土老翁而當村守護之靈神也と
記したる以里の海濱をへて鹽にて鹽里鹽と煉りて以

て業と云故より里人崇敬他より異かり

野元原

山田聖榮自記に曰氏久御代よ

氏久ハ島津忠
久よと六代 畠

山禮部下向鹿兒島野元原羅よ陣取王氏久曰々野伏と
出し合戦を或時禮部手より討てかく島津方の手に取
分る承及候山田彌九郎殿と申人に見参仕度候禮部手
に多田と申者にて候と名乗る彌九郎ハ四尺許の
太刀よ手楯と持也此是ハ何変りと傍輩と云ふさま
ハ我と戀るかとの仁たる如何さぬにも上太刀打むと
りむ手楯と差出て楯端と切りせて下と薙へし踏より
て組て勝負とせむと思ふかりとて手楯と持敵ハ袖笠

印ハシかき取ト付テ殊の外はまりて見互ニ出合ヒ多田ハ長
刀の大キかりて以て業の如くに上太刀に成て切テ懸ル
楯のくさ切ラせふニありて下ニ成カき敵の袖カトラ草
摺ヒ切リ拂ヒ互ニに踏ヨまシく敵長刀おれハ彌九郎ハ甲ハ
て川ニ互ニ真ニ向ニ吹返ニにシカ、ニあり西方ニやくハゆンと
をト見えテ後ニの兵共一度に走スりテのくる禮部方
よりモ同ク寄テのくる彌九郎云ク正ニしく敵の袖カさシ
るト切落シたりと覺ルとして太刀打ノ所ニ返シて志ス
しと太刀のさシにシはシめテよりハ是レ御覽候へ今日
の勝負の志スりト云フと云フて時ニ作ルと云フて禮部トハ南

朝の大將畠山治部大輔國長一書畠山修理にて文和三

年九月鹿兒島に来り東福寺城ト攻むとて薩摩大隅日

向三個国の南朝の軍ニ率ヒ軍ニ二ニに分ち一ハ野元ハ

に軍一ハ原羅に軍ハ島津氏久霧ト以て衆ニ對シ連テ

戦數日其時の戰場カり多田ハ通称ト七郎トいハ里山

聖栄ハ島津忠久より二代島津忠時ハ他腹の長男山田忠

継ヨ里五代山田久與ハ嫡男ニて出羽入道ト号シ文明年

鹿兒島

荒田村

八幡神社

奉祀 應神天皇 玉依姬 神功皇后 例祭九月二十三日

創建の年月詳からず園村の生土神にて往古ハ鹿見島
此宗社なりと云ふ建久八年薩摩国園田帳に大隅正八
幡宮御領鹿見島郡荒田荘云々東鑑に元久元年十月十
七日大隅正八幡宮寺許申云々荒田荘地頭山北六郎權
頼云々とある荒田荘なり相傳へて此所まで大隅正八
幡宮の神領にて境目の驗に當社と建立ありといふ
やもく大隅八幡宮ハ神名帳に所謂鹿見島神社にて後
に八幡大神と合祀せしよし八幡宮と社号と唱へ来
りふれハ當社も始ハ鹿見島神社と稱して祭神彦火々

出見尊かまにやありむむ又鹿見島神社と八幡宮と
唱ふる後に成りての建立にて始より祭神今の如くか
ましは是等ハ考ふに據か一元龜二年四月下大隅の
国の中垂水郷の辺より以南の 賊徒襲ひ来り當社と乱
敷郷と往古下大隅といへり 妨し神宝と奪ひ舟に乘りて飯りに暴風を
宝物皆海に捨たりといふ毎年祭日に荒田濱に行宮と
設り神輿と護り下り神官前後と圍み神樂と奏す神輿
と昇り壯年の男子とも声と発し前に進む事十歩か
れハ退く事又十歩あり左右も是に同一かくれ如く屢
進退をりて神の喜ハ給ふと云ふ大かき傘或ハ鉾旗か

少と携へ陪從を遷御の時も始に異からひ又荒田村の
四方此端に隨神祠ありて三年目の春毎に神輿と奉し
て甲境と巡り是と境田といふ一社毎に神輿と駈り例
かま行装祭日に同し社内に天正二年甲戌十二月廿六
日武内殿一字再興と記せり梁文ありと今具社か
○瓊蛇鎮符 當社ハ蜈蚣毒虫と太く惡坐に因て荒田の
一村絶て此虫と見り事かし是故に皆人社此下かり砂
と拜請して鎮符とを常に是と懷中をれハ他所に於て
も此害と被り事かし又蜈蚣に此砂と撒い瘡傷て勤く
事と得をして終に死と云

鹿兒島

郡本村

一条神社

奉祀 天照大神

例祭九月九日十月朔日

創建の年月詳かり社傳に薩摩國穎娃郡開闢神社と
迎祭して社号とも上古開闢と唱へ彼穎娃郡かり開闢
神社の薩摩國の一之宮に倣ひて一之宮とも云ハ
し後々い混淆して遂に神官等爭論起り故に吉田
兼連よ請ひ社号と改めしとソル
一説に郡山郷に一の
宮あり是に分と云ふ
貞享五年二月の棟札に一之宮大明神とありて元禄十

四年の記録にハ一條宮と見ゆ此此の改号にヤ宝永八年辛卯二月六日の記録に一之宮大明神と唱へ候処近年ハ一條と唱候とあり建久八年薩摩國圖田帳に郡元社七町五段鹿兒島郡内と見えハ是か里十月の祭祀に神輿濱下里あり神社より巽三町許海道の傍に古松ありて其松蔭と柴立と呼ふ此処に神輿と駐る例あり

鹿兒島

小野村

聖之宮

創建祭神詳おふに園田清左衛門宅地にありて

稻荷神社と會祭す即ち清左衛門氏神かり 應永十二年豊此地と園田に共ふ子 八月島津久孫承襲して爰に住居に 大永六年島津八郎左衛門實久實久ハ九代島津忠國弟島津用久より 叛し同七年其黨五世にて坊時薩廣國出水郡等と領を 鹿兒島に充つ此時島津貴清水城に在り 清水城前 十五日夜侍臣と相議し城と出て園田家に入る賊徒追ハ逼り園田清左衛門實明貴久と聖之宮に匿して危難と免る

高加水神社

奉祀 伊弉册命 例祭九月九日

木村時勝建立といふ系圖と按じりて時勝ハ北條高時

弟泰家、三世の孫なり。泰家熊野の神と奉し薩摩、国祁
答院に來り時勝後、祁答院と去て此高加木山に移り
當社と建立し木村と氏とを額に高加木と記し、棟札に
ハ高鍵或ハ高賀木とあり、名義知りへらり、此地山嶺
神社と圍て其間楓樹多し、後の巖壁より飛泉二流社と
挾きて瀉す、落つ社の左おれと男瀧、右ふら女瀧とい
ふ紅葉の時ハ下流に映して錦と浸せり、ら如し其景賞
を々に足きり

鹿兒島

草牟田村

鹿兒島神社

奉祀 彦火々出見尊 豊玉姬命

例祭 二月七日
十月十七日

創建の年月詳ならず、社号と俗に宇治瀨と稱し、應永十

五年寛正三年の棟札に宇津佐大明神とあり、宇治瀨宇

津佐通音なり、三代実録曰、貞觀二年三月廿日、庚午薩摩

國從五位下鹿兒島神授、從五位上とあり、是なり、社頭より

町許に大河ありて、神月川といふ、古來相傳へて、二月十

月の十七日夜、川逆流を又櫻島小池村、穗尾崎の海と

過き、ハ船膠て進まざる、海神のさて祭日に、此処より南半

當社に講給ふに因き、と云

里余鹽濱の海辺に行宮と興て、神輿臨幸の行装壯觀か

里騎馬の神官數十騎前後と守護と歩行の神官に至り

てい其敷と知り以又町家の氏子とも男女供奉の華彩
し其中に女子の十二三歳ある者共白衣緋の袴にて神
比枝と各携へ五六人供奉を先一番に御鈴と携へ次
々よ次第と奏さ次大かゝ傘數十本或ハ幡數十流と翻
し路をわす神樂と奏は行宮に至り祭式畢りて還御始
の如し

神月川 水源郡山郷より出づ東に流り、車敷里にして
鹿見島神社の前に至り南に折き新上橋西田橋高麗町
橋武之橋の四橋と過て海より入り鹿見島第一の大河か
り神月川の名義詳あるは或ハ鹿見島神社の神嘗月の

祭の畧称ありといへり

鹿見島

上伊敷村

石堰 鹿見島神社より北半里許に在り即神月川の上流
あり高十間横十間許切石と疊ミ上りて大河と湛へ西
南の山下に大渠と堀通して此水と引き畝畝の間に回
りして遍く田地に灌く是に因て伊敷村ハ云々更あり
下流小野村草牟田村永吉村原良村西田村武村荒田村
等の數村更に早魃の患と知り以又此川香魚多し二三
月の頃ハ釣以て是と釣り七八月大かゝりに及びてハ綱

以て是と取り堰より上流に至ると其年魚大さか
上流に登りに従ひまゝく大きにすて長大かり八尺
余まゝり

鹿兒島

下伊敷村

伊尔色神社

奉祀 伊尔色命 稻倉魂命

創建の年月詳かり三代実録曰貞觀二年三月廿日庚
午薩摩国正六位上伊尔色神授從五位下とあり伊尔色
命ハ垂仁天皇第二の皇子にて書記ト五十瓊敷入彦命

古事記に印色入日子命とあり三代実録に伊尔色村の
名と伊敷と呼へり伊尔色の畧称かり白尾國柱

曰此地蓋五十瓊敷入彦命之采邑因名焉者歟畿内志曰
河内國河内郡曰下村御所池古事記印色入彦命造曰下

高津池即是又和泉大鳥郡取石池在綾井莊廣五百三十
余畝垂仁紀曰作高石池又同國日根郡珍努池在野々村

西廣三百三畝相傳印色入彦命所鑿今日布池又同村樽
井村君池廣五百畝相傳印色入彦所鑿云々是皆古の時

開荒の処かり今伊敷村の左右皆水田多し蓋垂仁御宇
印色命天下に周遊して池塘を鑿り水を導ぶ新墾と勤

て大に民よ功あり故に祀と奉りて邑名に存せりから
ひ云々といへし今此神社と土人年之宮或い年之神と
といへりハ此神の恩澤に依りて世に飢渴の難と知り
寸殊に伊敷村ハ他に勝りて水旱の患なく年々稲穀豊
饒なり故ありへし稲穀の能く稔ると祝詞に多く年
といへり又上古開拓の事と國引と云り出雲風土記に
ハ島士奴美神と國引聖神とありハ此神出雲國と開
拓為給へしに因てかり正平十三年四月廿八日島津氏
久鹿見島諏方神社に神領寄附あり一時の状に伊敷村
國引田一町云々とあり其時まてハ古言の遺れりと思

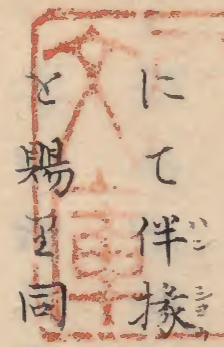
ふへし國引田ハ今新田と云むじり如し

伴掾館 伴兼行居城の址かり伴姓系圖と按とりに大友

天皇の皇子余那足始賜伴姓傳七世至伴掾大監兼行始

居薩摩國鹿兒島神食村至曾孫兼俊領大隅國肝屬郡辨

濟使とありて兼俊以前伴氏の居城かり此地方四町許



にて伴掾御館と号す長元九年九月兼俊大隅國肝屬郡
と賜同郡高に移る自後伊敷彌次郎忠純伴掾館に守

護たり忠純ハ長谷場六郎久純二男にて伊敷村に住む

故に氏とすさて伊敷の名ハ伊尔色神社より出て所付

家譜にいとゆる神食村ハ即今の上伊敷村かりといへ

里さ此中兼行居城の跡ハ今下伊敷村シモイシキムラかり是に因て熟シユク
按とりに此上伊敷下伊敷の兩村往古ハ伊敷と号して
一村かりしと里民ミタタチ私シに分ちて内々上下と唱へ彼旧跡
上伊敷此方に属し弟むと後に檢田ありて下伊敷に隸ツク
しにやありむ貞和六年二月の古記に甘子木村と書た
りとも思へハ當時定まり文字無きハ故に心に任せ
神食カミケと書カキ里々むカキ藤野某藏書嘉曆二年閏九月探題英
治里又正平六年佐多三郎左衛門尉忠光伊敷村と領し
て此地に住せり車其家譜に見ゆ又正平十三年五月朔
日山田諸三郎忠經に上伊敷村さて所屬の家と大友天
地頭と賜ふと山田藏記に見ゆ
皇の後裔ありといふ事疑ハ無に非を伴姓ハ其本大伴

にて天押日命の後かり淳和天皇の御諱と避て草姓に
ハ成りかり姓氏録に大伴の出所種々見えなれと與那
足の事ハ見えハ以事大隅所屬郡高山の卷にいふへし

春日神社

奉祀 建甕槌命 經津主命 天見屋根命

伊尔色神社イニシキの西一町余に在り文祿三年近衛信輔公薩
摩国坊津に謫せり此所ココに暫く移居ありし時飯京の
祈願に建立ありしといふ三十六歌仙の歌と親書して
奉納ありしと正徳年中官に收まると也

青屋松原アヲヤマノマツノハラ 郡元村の海邊かり觀應年中薩摩國谷山郡司

平忠高國命に應也才島津貞久兵と祭して谷山波平に
陣と取り忠高弟祐玄に命して兵と領し間道と經て鹿
兒島と谷山との境牛落青屋松原よりに出て後路と断
しむ和泉右衛門兵衛尉忠直貞久舎弟下援兵と率し牛
落に至り道路更に人無し伏兵後路と断と察し兵と青
屋松原に隠し忠直草騎にして行く時に祐玄亦草騎に
して来りに會才共に勇悍の名ある忠直精神と勵し祐
玄と捕て首と斬り青屋の軍進みて敵と討つ敵悉く遁
き去り忠直波平に至り貞久に會と忠直の勲功と感せ
り者かし一説は康永元年忠直後より親戚と離き獨り
壬午の八月と云

征西將軍宮に従ひ薩摩と去て豊後國に徙居して遂に
陣中に死す忠直子氏儀其子久親猶豊後に在て宦軍に
屬と島津氏久に至り親戚他國に放き居るへりすと
て頼に招き還し日向國深川院と采邑に與ふ久親二子
阿里長と直久次と忠次と号と島津久豊に従ひ川邊松
尾城に於て兄弟俱に戦死と白尾國柱曰南北の皇統順
逆と以て議すれは北朝と擯け南朝と擯るかの國より
天下の公論かり云々忠直獨り親戚の群と離れて足賊
の招に應せと征西將軍宮に屬し奉り忠勇義膽敢て其
節と屈せとて豊後より徙居し終小陣没す名分よりし

て是と称せし吾藩勤王の士忠直と以て朝楚ととへし
後世成敗と以て事と論し足利、催促に従ひ軍功と抽
つかせしへるその実ハ賊と助布叛と興亡にあらざ
や其功愈大かきハ其罪愈大なりといふるしといへり
牛落 郡元村に屬して鹿兒島より谷山へ往來する街道
あり西ハ懸崖にて東ハ海を望み皆入横津國一之谷に似
たりといふ山田聖榮自記に鹿兒島の内牛ぶらし或ハ
牛落し或ハ牛がぶら濱といふハ此所あり今俗牛懸灘
といふ谷山祐玄陣營の跡あり

紫原 郡元村の野岡にて牛落の西に續布望天正八年己

亥三月十三日島津貴久谷山の敵と討つ此時島津八郎
左衛門實久谷山と奪ひ貴久に敵と又谷山本城の城主
祢寢播磨大軍と率い實久と助布紫原に迎へ戦ふ貴久
是と敗り播磨と始以下の將卒數十人と斬る

鹿兒島

原良村

原羅營 今原良に作り即前に出たり文和年中富山國長
の陣營あり又應永二十年十一月島津家臣伊集院頼久
反して清水城と焼き退し此所に陳じ此時島津久豊
より大隅菱刈の乱と鎮むる為に清水城と築し同郡吉

田に至る此變と聞即馳せて鹿兒島に還る吉田清正吉田
領主蒲生清寛蒲生等是に従ふ同月十二日久豊軍と進む
清正清寛以他従兵多し小野原羅西村の間に戦ひ頼久
の軍と敗れ敵の大將町田土佐日置肥前等數十人と斬
獲し頼久と此營に圍む頼久進退道かく自刃せむと
清正清寛等頼に一命と請ふ久豊聽らむ再三に
許して所領伊集院に帰り此事清水城の条にも出た

鹿兒島

比志島村

比志島城比志島當城ハ満家上総女重賢入道榮尊居城かり榮
尊ハ信濃国の守護職志田三郎左衛門頼重子かり頼重
故ありて薩摩に謫せり島津忠久是と扶助して比志
島村に置く頼重満家院郡司孫太郎永平の女と娶て榮
尊と生む榮尊満家と以て家号と依頼重赦免ありて信
濃に歸り榮尊永平と讓て受て満家院と領と満家院ハ
鹿兒島に隸たる

鹿兒島

小山田村

高城高城一名と小山田城といふ建武辛中小山田彦五郎景

範居城かり

景範ハ上総ノ重賢子孫也
志島孫太郎志範第二の男

應永二十一年正

月二日伊集院頼久當城と攻む城主小山田伊賀範清一

族出羽義村淡路貞清以下終日戦ひ兩軍死傷多し

○平城 高城の亥子方一町余にあり小山田一族城

主たる

小山田瀑布 平城の北三町許にあり水源郡山郷の山中

より出つ高五丈五尺横狭くして水勢壯かり土俗陽瀧

と号せ一名と布引といふ左右藤多し又平城の南に陰

瀧あり高僅に二丈許あり下流共に神月川に入り

孝子喜左衛門傳

孝義録曰薩摩國日置郡山郷小山田村孝行者喜左衛

門ハ高七持ぬ百姓かり父ハ室永の始失希々に其常に

居一町の席と母の居所に定め置て己ハ其下に座し聊

も不敬の躰とかな次早く妻とも娶りり母と養ふ事

疎かりとて出しや且其後妻と迎へよとありハ卑賤の

身にて孝心ありむ妻と擇へき事心に任かたしいりに

と己一人して心のまゝに養むとて晝夜母の側に在り

て奉養念りず小山田村に藏屋敷ありて村の民三四人

つ、日夜輪番せし事ありしに喜左衛門の番に當りて

る日ハ同し番にありて若と頼一刻つ、暇と乞て

母と省ミ又ハ人のもてかゝりに招きて母の獨りて
佗カ一カうカむ事と思ひ頓トに坐と立て酒と求め飯と母と
共に樂レ多ク里宝永六年五月領主より慶美して鳥目若
干取リ也キとレ云フ

鹿兒島

吉野村

大鼓橋 積水川の川上竇方にあり、兩岸自然の巨岩より
切石と組架して柱ハかし兩岸の間狭くして洪水の時
常の橋にてハ保ち難おに因てかり水門圓くして大鼓
の如し

鳥越

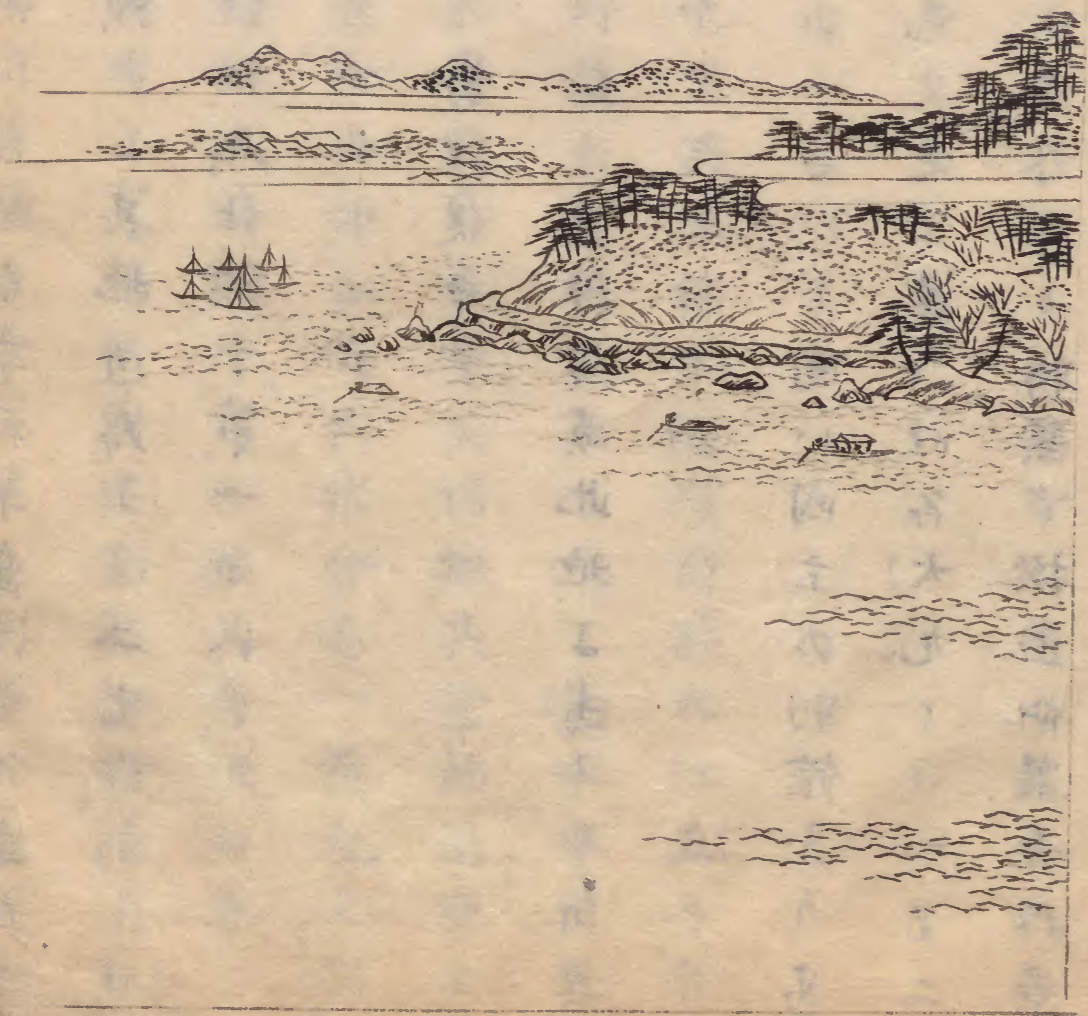
東福寺城の西の麓後迫より大磯に越り坂路あり
此方より里升る車中天に沖りり如く彼方より降り車無底
の谷に陥りり如く飛鳥岬峠と越りに地と放る事僅に
尺よ過と

大磯

田之浦の北に接て同し海岸あり一名と仙巖洞と
いふ翠嶺後と圍て其間に彼鳥越の一路通を東ハ高十
穂の靈山と遙に望ミ西南に開開嶽富士の面影と摸し
前ハ間近く櫻島に對を九南の方山川の海口より東福
山に至りまして二十余里一望の中にありて其風景十熊
萬狀具に述へりり鹿兒島第一の勝地あり



Vertical columns of Japanese text, likely a poem or descriptive passage, located at the top of the left page. The text is arranged in approximately 10 columns, reading from right to left.



菅原神社

大磯松ヶ平に在り貞享三年島津光久建立す

祭日八月二十五日大磯の岸頭に於て其地道路より二丈許高し此

地此風景と眺望とむに此社頭と第一とい

白山神社

奉祀 伊弉冉命 菊理媛命

大磯山下川の北岸に在り島津吉貴此地より遷して再真

寸初め鎮坐の地審かふ以

仙巖園 仙巖ハ大磯の一名にて園ハ國主の別館かり萬

治年中十九代島津光久是と建つ曰名大丸といへり二

十九代島津重豪園の内外かゝ勝景と撰ひ仙巖十六景

と号し清人の詩あり石に刻して園中に建つ又喜鶴亭

あり事ハ其記に詳かり左に載は

喜鶴亭記

喜鶴亭在本府城北十里具城錦峯繡嶺前臨大江且多奇

石故比於龍虎山之仙巖云天明丁未之歲 老太守中將

公至自東都暇日遊於喜鶴亭者屢矣因據其登臨游觀之

狀最可喜者為十六景命画師各圖其狀合為一卷既又別

寫其圖託長崎人林梅郷求詩及序為一帖又命臣山本正

誼為之記謹按万治年中 寬陽公創建別館於仙巖洞名

曰仙巖園其後寬文年中新構一亭落成之日宴於亭上適

有雙鶴自東而至，翩翩颺遂降庭前，飲啄棲止，移時不去。於是群臣拜賀，以為嘉瑞，奉觴上壽，皆呼十歲，因謂其亭曰喜鶴。而學士大原林齋為之記，即今亭也。記文實在壁上，蓋本府城下多山水，而仙巖洞最善，洞中多園池，而仙巖園最善，園中多佳處，而喜鶴亭又最善。於是內聚竹樹泉石之美，外鐘江山林壑之秀，千態萬類不可具狀，然其最善者莫若十六景。以下略也

十六景序

夫天曰蒼天，海曰碧海，扶桑曜日，若木舒華，斗柄乍着，具東指，宇宙皆春，地維不缺，千巽方山川並秀，乃有薩摩國者，即

日本之連疆也。臨以碧津，迎茲險嶮，斜演折水，遙峙沃焦，非藉巨靈之擘，偏成海外名山。乍當羲馭之外，便見日邊好景。園惟瀕水，即是瀛洲巖，亦稱僊何殊，蓬島千萬里，經遊非過十六勝地，堪誇豈不足以壯游觀，供眺覽哉！今此重洋穩波，忻看輻湊之蕃，船官貨交通，羊喚往來之唐客，撫此地林泉，新遠人耳目，增邱壑於胸中，走風雲於筆下，倚蒨闥妙手繪，出層巒借顧，陸奇才寫成尺幅，於是搜問學士，拈珮管以哦詩，選勝文人，含霜毫而得句，春風畫閣披圖，瞻東海之雲霞，細雨曉牕揮筆，揮西園之翰墨，遂使王摩詰即畫即詩，並傳其妙，非若謝幼輿一邱一壑，得畫其奇也。爰製序言，以辨簡

首歲在著雍涇灘園余月穀且左春坊錢榮

鳴雨泉シラレノシキ 戊申仲夏 外史曹鎌光

山脉通源日夜流 淋々似雨響園秋

烹茶石鼎供茶話 七椀邀盧一咲休

赤松林アカマツノハヤヒ 雲南學政吳俊

北枝低亞翠成堆 未受秦封次第栽

薄暮擁清風影動 疑撐月到薩摩來

騰蛟石ノボリヨノイ 翰林庶掌出知福寧刺史江琅

雲根拔地幾何年 形肖蛟騰却宛然

千古青蒼冠名勝 每逢風雨似昇天

香楓巖カキノイ 經筵講官戶部尚書董誥

春風吹醉早楓丹 夾岸香來到曲欄

此景獨餘海外有 神僊應羨是奇觀

蕃蕉邱バナナノサカ 翰林修撰汪洋

培成翠碧帶山腰 葉々迎風鳳尾搖

也抱歲寒心似鉄 不驚飛雪響蕭々

修竹徑シラノミチ 史部右侍郎順天學政金士松

玕琅千萬立成林 細路通人幽境深

傍午不知過赤日 清涼慣透愛吟心

荻蒿叢ヨモギノカサ 翰林院編修范來宗

歷乱秋風影不齋

含煙和露隔花溪

莫嫌寂寞蓬蒿迳

慣遣高人遠托栖

アツツク 葡萄架

翰林院編修加一級嚴福

漢使西歸味共探

移栽嘉種遍東南

結陰成架初添竹

珠帳艸竜護碧嵐

以上仙巖園中八景

キタノミヤ 菅神廟

御史李蔡

巍然神宇白雲邊

靈爽憑依別有天

洗淨塵緣留好景

楓香蕉色寺門前

サクラガハ 櫻花溪

太守王文治

張家紅粉擅風流

圖盡天然到練洲

好賺漁郎成問訊

一溪春滿東海頭

リウカウ 龍洞院

兼宣布政司王昶

天平遙對院門青

四月寒生古樹林

噓氣成雲迷洞府

蒼苔冥漢瑣層陰

トコエ 飛鳥越

大學士嵇璜

灰徑垂空翠碧山

人依飛鳥試躋攀

紅塵不到芒屨底

徐度松雲幾疊閑

アハノウ 朝夕池

主事顧宗泰

群峯環抱一泓秋

水落水高早暮流

正合僊園人游足

杲然身已到瀛洲

正練洲

侍郎蔣元益

雲羅霧縠影相將

疊雪輕勻帶水鄉

倘借白魚拖玉尺

量來應有幾多長

天平山

翰林院編集梁同書

高峯儼與碧霄齊

真立當空萬象低

絕頂徘徊天関近

何須更上步雲梯

海門山

侍讀學士彭紹觀

海門兀峙鎖洪濤

詭抗前津風怒號

萬里來潮客出入

玉鯨隱々與金鼈

以上仙巖園外八景

三船神社 大磯より東半里許海岸にあり祭神及び創建

の年月詳ならず小児の諸病及び痢疾此煩ひからぬ

事と祈るに靈驗ありとて海陸より詣人夥し此地松林

の中にて前ハ海に臨ミ風景愛とへし

物産

器用 大小砲 刀槍 弓 矢 磁罫 櫛

飛禽 鶴 雁 鳧 雉

走獸 猪 鹿

鱗介 鯛 方頭魚 金線魚 鮓 此位諸魚多し

飲食 諸野菜

花卉 牡丹 芍藥 菊 桔梗 蘭 萬年青

鹿兒島郡

吉田郷

鹿兒島の東三里余不里周廻拾里三町廿六間東重富南

鹿兒島西郡山北蒲生に接む村落五 東佐多浦村 西佐多浦村 本城村

本名村 宮之浦村 高六千六百六十八石二斗六升八合余士族千百

九十二人 男五百九十七人 卒二百九十二人 男百四十八人 女五百九十五人 人女百四十

四平民二千三百五十三人 男十百八十一人 惣人員三千 女千百七十二人 惣人員三千

八百三十七口惣家部九百十七戸當郷八回始羅郡に属

せし天正十五年鹿兒島郡に隸し往古大藏行忠敷世

吉田と領と天仁三年正月大隅國国府郷八幡神社の執

印行賢吉田と奪ハ八幡の神領とを既にして源為重に譲リ為重ハ源為朝次子かるといふ大日本史為朝の傳に古老の傳説に拠て記す為重是と外孫長太夫清道子譲リ清道吉田の家号とハ其子吉清右大将頼朝に仕小吉清より九世の孫吉田清正島津元久に従ハ京師に上リ能登守に任寸後より島津久豊執事を以永正十四年清正より五世の孫吉田若狭位清吉田城に拠て謀反を同年二月十二日島津忠隆親軍と領一來りて城を攻む位清力盡むて降と乞ひ十四日に城を開渡して薩摩國出水郡山門院に走り忠隆守兵と残して軍と飯と津志真に寄る忠真卒

一て其一族島津善左衛門り為に殺さゆ

同郷

宮之浦村

牟禮之岡 鹿兒島より東三里許あり此邊第一の高岳にて絶頂に登ルハ鹿兒島と一望にを麓ハ吉野の牧あり絶頂に石の小祠ありて牧神と云其祠に貞享二年己三月十九日と鐫記す

同郷

本名村

三重嶽

此嶽東ハ吉田郷に属し北ハ北志島村あり山中

に谷川ありて境とす双方の山中櫻多し満開の景と見
於者愛賞せざるハ無しされ路遠くして容易く行ふ
見り事と得以常ハ樵夫の輩是と見りのみ

同郷

西佐多浦村

王子神社 同村王子原にあり創建祭神詳かり以永正十
二年丁丑二月島津忠隆天正廿三年甲寅六月三日島津
貴久再貞の掾札ありよー古老云傳へたりよと今傳
はら以吉田郷の宗社にて例祭二月初申あり

黒山神社

都津宮神社

此兩社王子神社と同殿にて祭神詳かり以始黒山神社
ハ黒山に鎮坐あり黒山ハ吉田郷西佐多浦村 都津宮
ハ吉田郷裏に鎮坐ありと往古神宮夢に王子の神頭
と給ひ黒山都津宮の兩社と我と同殿に會祀すへいと
置い城主も姓名傳ハらに其夜同く靈夢と蒙り此に因て兩
社と王子神社に合祭をといふ其年月詳かり以
松尾城 吉田吉清守護方に屬して累代の居城ありと
永正十四年吉田位清叛して遂に落去を事と初祭と詳
りあり其後島津左衛門歳久島津義久弟吉田の領主たり後

又祁答院に移して此地鹿兒島の直隸と云はれ

物産

竹木 樟 櫛 甘櫛 櫛 杉 孟宗竹 苦竹

走獸 猪 鹿

鱗介 年魚 鰻



備前守

